

伊藤一彦著

『老いの花 続・百歳がうたう 百歳をうたう』  
(鉦脈社)

介護や支援を受けている全国の高齢者を対象に、宮崎県が主催している「心豊かに歌う全国ふれあい短歌大会」。タイトルに続、とあるように、本著は十年区切りで出された大会応募作秀歌選の第二集になる。

百歳の母とふたりで車椅子なさけないのか幸せなのか

村方シヅ子(84歳・宮崎県)

老々介護の現状をユーモアに歌い、不自由な状況を逆に幸せなかも、と嘯いて見せる。本著にはこういった老いの苦しさを笑い飛ばしてみせる作が本場に多い。そのバイタリテイの源泉は間違いなく介助者との繋がりがある。超高齢化社会の現場における先輩方の歌に豊かな「今」と、輝く「明日」が見えることに感動する。

老いたると言わぬが花と言われしも老いには老いの花もありけり

大野キクエ(88歳・宮崎県)

長寿を全うするのに避けて通れない老いの苦しみや介助者への負い目。他者と繋がる土壌、介護という柵で囲われたそこを泥と見るか、花園と見るか。(梅田 陽介)

東直子著

『一緒に生きる 親子の風景』  
(福音館書店)

月刊誌「母の友」で二〇一五年から二〇二一年に連載されたエッセイを中心とした七〇編の子育てエッセイ集。自身の体験や身近な親子たちの姿が、親しみやすい文章で綴られている。興味深いのは、古今東西の歌人、詩人、俳人の子育てに関する作品が数多く引用されているところだ。

茨木のり子、河野裕子、葛原妙子、窪田

章一郎、小島ゆかり、小林一茶、高野公彦、谷川俊太郎など四十名以上の作品に触れ、それぞれの時代背景や、個人の置かれた境遇の中の子育てに思いを馳せた。時代の流れの中で大人の価値観やライフスタイルが変化し、子育ては確実に変化する。より良くなる変わっているところもあれば、昔の方が大らかで子育てしやすかったのではと思ったりしながら、子育ての本質や理想についても立ち止まって考えさせてくれる一冊だった。

山崎ナオコ

山崎ナオコという対談では、子育てを長いスパンで考えたり俯瞰して捉える視点ももたらえた。回想でも良いから、子どもの歌が詠みたくなった。(真島 陽子)

久我田鶴子著

『短歌の〈今〉を読む』  
(砂子屋書房)

題名には「二〇二一年、コロナの日々に」が添う。出版社のHPに投稿された一五六名の作品の一首鑑賞。

戦争、震災、ジェンダー、親しい者の死、病、家族、他者……。幅広い世代の様々なテーマの作品から今の時代が映し出される。理不尽で不確かな生の、それを引き受けて生きるしかない痛みを、筆者は語句を確かめ、韻律を探り、疑問は疑問として自らに問いつつ丁寧に読み解いていく。

「苦しいときも、辛いときも笑えたい。(略)笑うことができればなんとか生きられる。」「語りたくないという気持ちでいるのなら、それを尊重しなければならぬ。」前は東日本大震災の後に再び台風禍に遭った体験を詠む歌に、後は長崎の被爆を詠む歌に寄せられた言葉。

読みながら「伴走」という言葉を思った。作品を尊重すること。受け止め、寄り添うこと。痛みや悲しみをもたらず不条理へ時に怒りを表すこと。鑑賞に導かれ、読みを深める中でひとりでは見出せなかつた一首の世界に眼を開かれた。(鈴木千登世)